

カブリーヴィの辞任についての覚書

吉 田 輝 夫

- 1 はじめに ——問題の提起——
- 2 時期区分
- 3 カブリーヴィとポート
 - (a) カブリーヴィは何故プロイセン法での処理を主張するのか
 - (b) ポートは何故ライヒ法での処理を主張するのか
 - (c) フィーリの策動
- 4 皇帝のケーニヒスベルク演説の意義
- 5 皇帝の期待と現実との乖離
- 6 フィーリの後退
- 7 カブリーヴィ路線の再確認
- 8 解任劇
- 9 若干の結論

1 はじめに ——問題の提起——

ドイツ皇帝ヴィルヘルム二世 (Wilhelm II, 1859-1941, 在位1888-1918) は、どのようにまたどの程度ドイツ帝国の対内・対外政策の決定に関与したのかという問題は、1948年民主党系の亡命歴史家アイクの『ヴィルヘルム二世の個人支配』¹⁾ が刊行されたとき、論じられたことがある。アイクがヴィルヘルム二世の恣意的な専制的な政策当局への干渉ないし介入を強調したのにならして、法制史家のフーバー²⁾ やハルトツング³⁾ は皇帝は演説や言説ではしばしば激越な表現で物議をかもしましたが、憲法を逸脱したことはなく、政策の立案と執行とは宰相を中心とする行政機関に委ねられていたとして、皇帝の恣意的な「個人支配」を否定した。最近この問題は再び論じられているようである。1983年、サセックスの歴史家ロエールは、ビーレフェルト学派の指導的歴史家ヴェーラーの所説を批判して、次のように述べた⁴⁾。ヴェーラーによると、プロイセン・ドイツの権力ピラミッドは、ビスマルク失脚以後、その指導者を欠いたのであって、ヴィルヘルム二世は「影の皇帝」にすぎなかったという。しかし実際には、多くの問題では皇帝の決定権力が中心的役割を果たしたというべきである。ヴィルヘルム期の統治過程で決定的に重要なのは、ヴィルヘルム二世の人格、彼の信頼する親しい友人仲間の性格である。経済的・社会的構造、宰相とプロイセン首相を頂点とする行政官僚機構の上に、宮廷社会の構造が覆いかぶさっていた。宮廷社会では皇帝なしに国王の権力は絶対的であって恩寵の付与あるいは収奪による恣意的な支配が貫徹された (Königsmechanismus)。この古い宮廷世界と近代の「国家万能主義 Prinzip der Staatsomnipotenz」との複雑な関係を理解することなくしては、ヴィルヘルム期の政治と歴史は把握で

きないであろう、と。確かにこの批判は鋭く、ビーレフェルト学派の弱点を衝いていたし、私も学ぶところ多かったが、私としては疑問がないわけではない。ここではそれを抽象的理論としてでなく、事例研究のなかで提起してみたいと思う。ロエールのいうように、「理論やモデルが妥当するのは、経験的に確認できる現実を説明ないし解明できる範囲内に限られるという原則に、歴史家は従わなくてはならない」からである。

事例研究の対象として、1894年10月のドイツ帝国宰相カプリーヴィ (Leo [1891年に Graf] von Caprivi, 1831-1899) の解任にいたる政治過程を取り上げる。この経緯については、既にツェヒリンの先駆的研究がある⁵⁾。これはカプリーヴィ失脚をいわゆる皇帝のクーデタ計画との関連で分析した優れた研究で、今日も参照さるべき価値をもつ。前掲のアイクのヴィルヘルム二世時代史、ニコルズのカプリーヴィ時代史⁶⁾も、カプリーヴィ失脚については、主としてツェヒリンの研究に依拠しているかにみえる。ロエールにも1890年代のドイツ政治史の叙述がある⁷⁾。その史観にふさわしく、ここでの主要な関心は皇帝を中心とする人事の葛藤に注がれていた。カプリーヴィ時代は通商条約網の整備によってドイツ資本主義に新たな発展の基礎が据えられた時期としても知られるが、この問題を丹念に追求したのはヴァイトヴィッツであった⁸⁾。その他、カプリーヴィ失脚に直接、間接に関係する内・外の研究文献、史料は枚挙にいとまなく、基本的文献で未だ披見できないものも少くない。南原実氏はじめ多くの方々の御厚意でかなり参看できたけれども、十分に消化したとは到底いい難い。この意味でも小稿は中間報告の域を脱するものではない。

小稿が主に依拠した次の史料集ないし文献掲載史料は、括弧内のように省略し、本文中に割注として記した。略称、史料番号、発信人と受信人、発信地、日付（ただし、1894年は省略）など、必要に応じて記した。p. はページの略号、引用文中のゴチックは原文の強調部分である。

- 1 Walther Peter Fuchs (Hrsg.), *Großherzog Friedrich I. von Baden und die Reichspolitik 1871-1907*, Bd. 3., 1890-1897, 1980 (Fuchs, Nr. 1341. Brauer—Großherzog. Berlin, 12. Sept.)
- 2 Johannes Haller, *Aus dem Leben des Fürsten Philipp zu Eulenburg-Hertefeld*, 2. Aufl., 1926, (Haller, p. 162)
- 3 N. Rich/M. H. Fisher (Hrsg.), *Die geheimen Papiere Friedrich von Holsteins*, Bd. 3., *Briefwechsel*, 1961, (Holstein, Nr. 421. Philipp—Holstein. Rominten, 26. Sept.)
- 4 John C. G. Röhl (Hrsg.), *Philipp Eulenburgs Politische Korrespondenz*, Bd. 2., *Im Brennpunkt der Regierungskrise 1892-1895*, 1979, (Röhl, Nr. 989. Philipp—Wilhelm II. München, 30. Aug.)
- 5 Egmont Zechlin, *Staatsstreichpläne Bismarcks und Wilhelms II. 1890-1894*, 1929, (Zechlin, Anlagen 13. Caprivi über seine Entlassung, (A) Lerchenfeld—Crailsheim. Berlin, 29. Okt.)

2 時期区分

カプリーヴィは、1894年10月23日、皇帝ヴィルヘルムⅡ世に辞表を提出した(Zechlin, Anlagen 11. Abschiedsgesuch Caprivis. Berlin, 23. Okt.)。ここでは辞任の理由として、いわゆる転覆活動取締り法案(Umsturzgesetz)をめぐるプロイセン首相ポート・オイレンブルク(Botho Graf zu Eulenburg, 1831-1912, 以下ポートと略称)との原則的対立が挙げられていた。小稿もこの問題が発生した94年6月から考察をはじめることとし、次のように時期区分しておこう。

- (1) 1894年6月24日のフランス大統領カルノ暗殺事件から、9月6日の皇帝のケーニヒスベルク演説まで。カルノ暗殺事件を契機に無政府主義者と社会主義者にたいして如何なる態度をとるべきかが広く論じられ、政府部内は、宰相カプリーヴィの穏健路線とプロイセン首相ポートの強硬路線とに分裂し、さしあたり皇帝はカプリーヴィ路線を支持した。
- (2) 9月6日から、10月19日のプロイセン閣議まで。皇帝がケーニヒスベルク演説で強硬路線に転じると、連邦諸国は不安を抱き動揺しはじめる。とくにビスマルクが皇帝の強硬路線を支持すると、これに怯えたフィーリプ・オイレンブルクのグループは、カプリーヴィとポートとの妥協に努める。結果はカプリーヴィ路線の再確認であった。
- (3) 10月19日から、10月26日の宰相カプリーヴィとプロイセン首相ポートの解任まで。強硬派のまきかえし、穏健派の策動のなかで、政策上の争いは宮廷劇に堕し、結局、カプリーヴィとポートの何れも辞任し、皇帝の強硬路線も頓挫をきたした。
- (4) 10月26日以後。新宰相ホーエンローエの下で、本来の争点である転覆活動取締り法案は緩和され、秩序維持法案として94年12月6日、帝国議会に上程される。

3 カプリーヴィとポート

1894年6月16日、イタリア首相クリスピ(Francesco Crispi 1818-1901)暗殺未遂事件、同月24日、フランス大統領カルノ(Sadi Carnot, 1837-1894)刺殺事件と相次ぐ無政府主義者によるテロ事件が起ると、ヨーロッパ諸国は大きな衝撃をうけた。フランス、イタリアでは無政府主義者にたいする取締りが強化された。ドイツでは、90年9月末期限満了の社会主義者鎮圧法(Sozialistengesetz)の問題が再び論じられ始めた⁹⁾。皇帝はカルノ暗殺事件に極度に興奮し、転覆運動に断固として対処するよう力説した。7月—8月、皇帝は恒例の北海旅行に赴くが、このとき同行の、駐ウィーン大使フィーリプ・オイレンブルク(Philipp Graf [1900年に Fürst] zu Eulenburg-Hertefeld, 1847-1921, ポートの従兄弟、以下フィーリと略称)、外務省のキーダレン(Alfred Kiderlen-Wächter, 1852-1912)とこの問題を検討し¹⁰⁾、7月16日、宰相カプリーヴィに次のように命令した(Zechlin, Anlagen 6. Diktat Kaiser Wilhelms II. Drontheim, 16. Juli; Anlagen 7. Kiderlen—Caprivi. Drontheim, 16. Juli)「社会民主主義者と無政府主義者の宣伝活動、無政府主義的な、一般に違法な教説の公然たる表明、社会主義的指導者の用いるボイコットなどのテロ手段、さらに新聞の社会主義的傾向への支持にたいして、政府の武器となり得る」法案を作成するこ

と、これが「一般刑法の強化によるか、例外法によるか」は政府の判断に委ねるとした。そして「肝を潰した中産階級は自由主義者にいたるまで強力な措置を求め、例外的措置を頭から拒否していない。」「このブルジョワジーの不安な気分を利用し、維持し、高めるべきである。このため新聞を巧妙に利用すべきである」と。

ここには、無政府主義者のテロを好機とし、テロの脅威を煽ることで、一方では無政府主義者だけでなく社会民主党をも弾圧しつつ、他方では広く支配勢力の結集をはかろうとする政策の新たな始動が認められる。

行論の必要上ここで皇帝のこの新たな政策の意図をやや巨視的な歴史的展望のなかに位置づけておく。ビスマルクのボナパルティズム的支配の権力的基礎は、1879年の保護関税政策による「ライ麦と鉄」即ちユンカー（地主貴族、農業主）と産業資本家との同盟に求められる。元来、この保護関税の目的はドイツの農業および工業に国内市場を保障し、その発展をはかることにあった。だが保護関税の下で農業経営の合理的改善は等閑に付されたから農業の慢性的危機は克服されず、かえって深刻化した。ユンカーあるいは保守党は関税の引上げを要求する。一方、工業は発展するけれども、国内市場が狭隘であるため、過剰生産と価格崩落の危機にさらされ、これをカルテル形成（独占化）によって回避しつつ、保護関税引上げに反対する。食料価格騰貴は労賃上昇を招くからである。こうして保護関税による農業と工業との同盟は農業関税引上げをめぐる分裂の危機に直面するが、ビスマルクは戦争危機を煽りナショナリズムを鼓吹しつつ危機をそらした。90年末、欧米の資本主義国は経済不況に陥り、アメリカ、フランス、ロシアは高保護関税政策に移行した。ドイツでもカプリーヴィ時代は不況の時代であった。折しもドイツは各国との通商条約の期限満了にともなう更新に直面した（92年は15の条約更新を迎え「彗星の年」と呼ばれた）。カプリーヴィは交渉にあたって農業関税を引下げることによって相手国に工業製品の関税を引下げさせようとした。つまり、国内の農産物価格を引下げるとともに、工業製品の輸出市場を（とくに中欧、バルカンに）拡大しようというのである。彼は生活向上と社会政策によって労働者の社会的統合を実現すれば、社会民主党は衰退するだけでなく、国防力も充実される筈であるというが、ここには明らかに階級再編による国家的統合強化の意図が窺える。現実には複雑であるが、単純化して言えば、カプリーヴィ通商政策に、産業資本家は原則的に賛成し、ユンカーは反対した。社会民主党は労働者に有利になる限りで支持した。換言すれば、カプリーヴィは、保守党の反対にたいして自由主義諸党、中央党、社会民主党の支持を得て、通商条約網を実現したのである。ユンカーのカプリーヴィにたいする不満は、一つにはビスマルクにたいする期待の増大、二つには93年2月の「農業主連盟 Bund der Landwirt」の結成に端的に示される。農業主連盟は広く中、小農民層を結集し、94年には忽ち会員20万人を擁する一大圧力団体になった。こうして通商条約をめぐるユンカーは政府批判を強めるとともに産業資本家との亀裂を深めた。ここにビスマルク以来の権力構造の危機を認めた皇帝は、反社会主義的スローガンで「ライ麦と鉄」の同盟を再建しようとしたのである。この点では皇帝は親しい資本家シュトゥムの進言によるところ大きかった（Zechlin, Anlagen 5. Caprivi—Frhr. v. Stumm—Halberg. Berlin, 8. Juli）。

さて、さきの皇帝の命令に接すると、外務省の陰の実力者ホルシュタイン（Friedrich von Holstein, 1837—1910）は、直ちにヴェルテンベルク王国の参議院全権代表フェルンビュラ

一、ケルン新聞 (Kölnische Zeitung) のフィッシャーに相談した。この2人はホルシュタインの意をうけフィーリに「社会主義者にたいする措置の問題」をプロイセン首相ポートに委ね、プロイセン法で処理するよう提言した (Röhl, Nr. 983. Holstein—Eulenburg. Berlin, 16. Juli; Nr. 984. Varnbüler—Eulenburg. Berlin, 16. Juli; Nr. 985. Fischer—Eulenburg. Berlin, 16. Juli)。7月24日、フィーリは皇帝、キーダレンと相談の上、ポートに次の電報を打った。「転覆政党にたいする法の保護を求める声が高まっている。帝国議会で法案が成立する見込みは少ない。これに反してプロイセンでは立法によって暫定的に、ザクセン同様の措置 [集会の自由の制限——引用者] が達成できよう。プロイセン内閣でそのような提案をされたい。」(Röhl, Nr. 987. 注1) これにたいしてポートは、「帝国議会での立法による包括的措置」を望み、プロイセン法によるかライヒ法によるかについては、改めて9月初に皇帝の裁断を仰ぐ所存である、と回答した (Röhl, Nr. 986. Botho—Philipp. Berlin, 24. Juli; Nr. 987. Botho—Philipp. 26. Juli)。皇帝をライヒ法の方角に動かそうというのである。こうして政府部内には深刻な意見の分裂、政策路線の対立が生じはじめた。だが、8月になると、政府要人は夏季休暇をとり、表面上は政治休戦となった。ポートはサン・モリッツに出かけ、カプリーヴィは、8月27日—9月24日、カールスバートで静養した。

ここで若干の問題点を指摘しておきたい。第一は皇帝と宰相との関係である。憲法上は宰相は皇帝の助言者であるけれども、ヴィルヘルムⅠ世の信任を背景にビスマルクは實際上独裁的権力を行使した。だが、ヴィルヘルムⅡ世の下で宰相は単なる行政官僚に転落しはじめた。これまでの事例は省略するが、転覆運動にたいする措置という重要な問題についても、皇帝は宰相にもプロイセン首相にも十分に諮ることなく、しかも國政指導に全く権限も責任もない友人と相談し政策方針を決定し、その立案と執行を宰相ないしプロイセン首相に命じたのである。カプリーヴィは辞表で「陛下は最近重大な問題で、予め私の意見を徴することなく、基本的な決定を下された。これは帝国第一の官吏としての私の責任ある地位を蔑ろにするものであります」と遺憾の意を表した (Zechlin, Anlagen 11. Abschiedsgesuch Caprivis. Berlin, 23. Okt.)。また、バイエルンの駐ベルリン公使レルヘンフェルトに辞任理由を説明したとき、「陛下は政治責任を自ら負い、私ども助言者を単なる執行機関と見ている。これは私の帝国憲法の理解と異なり、私の責任感到そぐわない。」(Zechlin, Anlagen 13. Caprivi über seine Entlassung. (A) Lerchenfeld—Crailsheim. Berlin, 29. Okt.) といっていた。一方ヴィルヘルムⅡ世は、91年9月8日ミュンヘン市を訪問のさい賓客簿に「最高ノ法ハ王ノ意思ナリ」と記して物議をかもしたことに端的に窺えるように、王権神授説を信奉し、時代錯誤的な絶対主義的支配観を抱き、このため自ら統治権力を行使しようとした。だが現実には、統治権力から発議権のみを剝離させ、これを恣意的に行使したといつてよい。本来、発議権と執行権とは不即不離の関係にあるが、執行権のみを委ねられた宰相は、これまで以上に苦慮せざるを得ない。何故なら、ドイツ帝国の複雑な統治構造にあって、宰相 (プロイセン首相兼任) は、皇帝 (プロイセン国王) と帝国議会、連邦諸国政府、プロイセン議会との関係を調整しなくてはならなかったからである。しかも帝国議会は、社会民主党の伸張にみられるように、政府当局にたいする批判的姿勢を一段と強化していた。カプリーヴィのように、帝国議会との紛争を回避しようとすれば、皇帝との衝突に至るのは必然的

であった。もっとも、プロイセン議会のように三級選挙法によって保守勢力の蟠踞するところ、あるいは皇帝の人事権の及ぶ範囲については、皇帝の発議がそのまま執行されたといえる。ロエールは皇帝の決定権力を強調するけれども、これを掣肘したのは帝国議会であった。このため皇帝は帝国議会の選挙法改革による弱化、社会民主党の一扫を計画するのである。

第二に、ビスマルクは宰相兼プロイセン首相であったが、カプリーヴィ首相の下、92年3月ポートがプロイセン首相となって以来、ライヒとプロイセンとの複雑で微妙な関係は動揺しはじめた。ビスマルクは「プロイセン内閣の権威に基づかない宰相とは、独力で空中に浮ぶ綱渡り師のようなものだ」といったという (Zechlin, p. 98)。こうして不安定な関係にある宰相とプロイセン首相との意見が分裂し基本的に対立したため、ベルリンでの政府機能は麻痺せざるを得なかった。

第三に、まだこの段階では保守的支配層は「無政府主義者と社会主義者」とを明確に区別していない。だが、民衆運動あるいは労働者運動をどう把握するかによって、力点の置き方も変わるし、とるべき措置も異なってくる。このため無政府主義者、社会主義者 (=社会民主党)、さらに転覆運動という表現にはことさら留意し、煩をいとわず引用に努めた。

(a) カプリーヴィは何故プロイセン法での処理を主張するのか¹¹⁾。彼は宰相としての4年半の統治経験にもとずき、原則として、無政府主義者や社会主義者にたいする法的規制の有効性を疑い、むしろ社会立法の充実、現行法の適切な運用で十分に対処し得るとした。どうしても無政府主義者と社会主義者にたいする立法措置を必要とするのであればプロイセン議会で結社法や集会法を強化したらよい。保守勢力の牙城であるから容易に実現できよう。彼らを規制するために必要な刑法、ダイナマイト法、結社法、出版法などの強化を帝国議会に提案すれば、あらゆる政党は反対するであろう。新たな厳しい社会主義者鎮圧法を要求する意見があるけれども、かつて社会主義者鎮圧法が社会民主党の拡大強化を阻止できなかった事実を想起すれば、その有効性は疑わしく、賛成できない。ビスマルクは90年に、社会主義者鎮圧法に追放条項を付し強化しようとして失敗したではないか。新しい社会主義者鎮圧法が拒否され、帝国議会を解散しても、政府に有利な議会の構成が実現されるとは限らない。帝国議会選挙法の強力的改革 (クーデタ) という考えもあるが、これは非現実的であって、自らよく為し得るところではなく、その強行が日程に上れば、宰相を辞任する以外にない。カプリーヴィの意見はほぼ以上のようなものであった。さしあたりこれをカプリーヴィ路線ないし穏健路線と呼ぶことにしよう。この路線の特徴について若干補足的に述べておくと、その前提には、合法化された社会民主党の議会内外での活動にたいする一定の評価があった。カプリーヴィ路線を支持したホルシュタインは次のようにいう。「現在の慎重で抑制的な態度が必要なのは、社会主義の側がドイツで抑圧の口実となる具体的原因をつくらないためであるし、またその限りにおいてである。無政府主義者が始末に負えなくなると、当然、帝国議会でも彼らを抑圧する傾向が強まろう。今日まで、皇帝の労働者立法のおかげで、社会主義者などはドイツでは他国ほど無礼に振舞うことはない。どうして、われわれに、つまり皇帝に有利なこの相違を一貫して無視し、他国と始めから同じようにしなくてはならないのか。」 (Röhl, Nr. 1005. Holstein—Eulenburg. Berlin, 28. Sept.) いま一つ、フィーリの観察をあげておく。94年11月1日、彼は囑望する駐ローマ大使ビューロー (Bernhard [1899年に Graf, 1905年に Fürst] von Bülow, 1849-1929) 宛書簡で、宰相危機を回想し、

カプリーヴィを支持したホルシュタイン、宰相府長官ゲーリング、外相マルシャル (Adolf Hermann Frhr. Marschall von Bieberstein, 1842-1912) らについて、次のように述べていた。「彼らは、基本的には保守的ないし穏健保守的な官僚であるが、極左派に接近し、民主化された中央党をあてにし、平然として『社会民主党の票も計算に入れられる』とっている」と。フィーリにとっては社会民主党は極左派であり、彼らは「危険な『左翼偏向』」の徒であった。ビューローも同様にみていた (Röhl, Nr. 1027. Bülow—Eulenburg. Rom, Palazzo Caffarelli, 15. Okt.). ともかくカプリーヴィ派は社会民主党の分裂、穏健派ないし改良主義派 (いわゆる修正主義派) の国家内的存在への転化、これによる国家的統合の実現を期待するとともに、極端分子、無政府主義者などのテロ行為には刑法上の問題として対処しようとしたのである。

(b) ポートは何故ライヒ法での処理を主張するのか¹²⁾。彼によれば、無政府主義者や社会主義者の危険は重大で、帝国議会による以外にこれにたいする措置をとり得ない。プロイセンでの結社法強化などは「中途半端な不十分な措置」に外ならない。きびしい社会主義者鎮圧法が絶対に必要である。帝国議会が拒否したら、解散をくりかえし、選挙法改革を断行すべきである (クーデタ)。この問題では伸るか反るかしかない。こういうのである。これをクーデタ路線ないし強硬路線と呼ぶことにしよう。ポートは、1878年に社会主義者鎮圧法が制定されたとき、ビスマルクの下でプロイセン内相として法案作成にあたったが、このときも例外法が刑法強化かは激しく論議された。このときの状況と比較考察し、このときの経験がポートの議論に如何に反映しているのか、再版社会主義者鎮圧法の主張はビスマルク体制への回帰を意味したのか、などの問題については今後の課題としたい。ここでは次の点に触れるに止める。ポートを支持したのは、プロイセン蔵相ミーケル (Johannes [1897年に von] Miquel, 1828-1901) であった。彼は、9月14日、ブラウアー (後出) に次のようにいっていた。カプリーヴィ政府混乱の原因は人事問題というよりも組織問題にある。宰相職とプロイセン首相職は再統合さるべきである。無政府主義者よりも危険なのは社会民主党である。このためクーデタ路線を支持するが、カプリーヴィの下では貫徹できないから、宰相は更迭さるべきであるとして、宰相兼プロイセン首相にポートを推薦していた (ブラウアーは、副宰相兼プロイセン副首相にはミーケル自身が出馬するかにみえたという)。 (Fuchs, Nr. 1343. Brauer—Grossherzog. Berlin, 14. Sept.)

(c) フィーリの策動

フィーリは皇帝の命をうけポートと会談し、さらに政府部内の動向を探り、8月30日、皇帝に次のように報告した (Röhl, Nr. 984. Eulenburg—Wilhelm II. München, 30. Aug.). カプリーヴィとミーケルとの対立は激化している。マルシャルは宰相を支持している。ポートはきびしい社会主義者鎮圧法を望み、帝国議会が拒否したら、解散を重ね、選挙法改革を断行すべきであるという。カプリーヴィは議会の解散を全く考えないから、両者に妥協の余地はない。皇帝がポート路線をとるならば、宰相を更迭すべきである。カプリーヴィ路線をとれば、ポートは辞任し、宰相職とプロイセン首相職との変則的な分離は解消されよう。ミーケルも辞任しようが、これは農業主の反撥を招くであろう、と。ここではどの路線を選択するかは当然のことながら皇帝の決断に委ねられたけれども、フィーリがかねて願とするポート宰相 (そしてビューロー外相) の実現¹³⁾——それはまたクーデタ路線への転

轍でもあるが——に向って動きはじめたことは紛れもなかった。

9月5日、フィーリはバーデン大公フリードリヒ I 世 (Großherzog Friedrich I. von Baden, 1826-1907) に助言を求めた (Röhl, Nr. 990. Eulenburg—Großherzog. Wien, 5. Sept.). バーデン大公とは皇帝の叔父にあたり (大公妃はヴィルヘルム II 世の父フリードリヒ III 世の妹), 90年3月のビスマルク危機では、フィーリに協力して皇帝に助言と支援とを与え、危機克服に役立った有力な君侯であった。この書簡では、カプリーヴィ路線の本来の動機を帝国議会との紛争回避に認める一方、ポート路線は世論状況からして実現できるとしていた。ミーケル辞任が農業主の離反を招くことにも解れつつ社会主義者鎮圧法の問題にたいして如何なる立場をとるべきか、政府危機 (宰相、プロイセン首相、プロイセン蔵相の更迭問題) にどう対応すべきか、について助言を求め、9月23日皇帝と再会するとき、これらの問題が論じられようとしていたのである。明らかにフィーリは、カプリーヴィからポートへの宰相更迭について、バーデン大公の意向を打診し、出来れば支持を得ようとしたと推測してもよいであろう。

4 皇帝のケーニヒスベルク演説の意義

9月6日、皇帝はケーニヒスベルク (現カリーニングラード) での陸軍演習後の祝宴で、東プロイセン州の有力な保守的地主貴族を前に、次のように演説した¹⁴⁾。

「……さきの祝宴から4年になる。そのとき私はこう力説した。東プロイセン州は主に農業を営むから、何よりもまず、有能な農民階級の維持に努めなくてはならぬ、彼らこそわが君主国の柱石である。私は東プロイセンの繁栄と経済的向上に懸命に配慮するように努めると。爾來4年間、農業主は不安にうちひしがれ、挙句の果は、私の約束は守られるのだろうかと思われているかに思われる。それどころか、深く憂慮にたえないのは、私の親しい貴族たちから私の善意が誤解され、叩かれ、さらには反対という言葉すら聞かれることである。諸君！ プロイセン貴族が国王に反対するとは言語道断である、彼らは国王を戴くときにのみ、貴族たり得るのであって、これはわが王家の歴史の教えるところである。……諸君！ 諸君の苦しみは、私もよく知っている。私は国家最大の土地所有者であり、われわれが苦難の時代を生きていることは十分承知している。日夜、私は諸君の援助に心を砕いている。諸君も私を支援すべきである。騒いだり、諸君が正当にも却ける野党常套の手段を使うのでなく、君主と信頼にみちた話し合いをすべきである。わが門戸は何時でもあらゆる臣民に開かれているし、喜んで耳をかそう。今後そうしてもらいたい。これまでのことは全て水に流そう！……諸君！ われわれを襲う苦しみを、われわれの歩むべき時代を、われわれを教え育てたキリスト教の立場に立って、神の課された試練と見よう！ じっと耐えよう、キリスト教の忍耐で、断固として、より良き時代を期待して、耐えよう、わが古来の原則は、身分高ければ義務また重し、である！ 荘厳な除幕式が一昨日挙行された。皇帝ヴィルヘルム I 世の彫像が姿を現わした。ライヒの剣を右手に掲げている。法と秩序の象徴である。これはわれわれ総てにいま一つの義務、わが国家と社会の基礎を脅かす運動にたいする真剣な闘い、を想起させる。諸君に訴えたい、宗教のために、公序良俗のために、転覆政党にたいする闘いを！……」

皇帝のこの演説は決して即興的なものではなかった。ツェヒリーンは演説の起草者をミーケルと推測する (Zechlin, p. 113)。恐らくそうであろう。この演説にいち早く反応したビスマルクの「ハンプルク通信」(9月12日、朝刊)はこう論評した¹⁴⁾。皇帝の演説はよく練られ構成されている。皇帝は、東プロイセンの貴族や農業主が通商条約に反対した形式に不満を述べるとともに、これを免罪に付した。そして、より良き時代を期待して忍耐するように説くとともに、転覆政党にたいする闘いを呼びかけた。演説の核心はまさにここにある、と。この論評は確かに背紫に当たっていたし、それだけに演説の解釈の方向を規定した。

ケーニヒスベルクでは、皇帝はカプリューヴィの政策に不満を抱く分子に取り囲まれていた。軍部は93年7月の軍事法案での2年兵役制導入に、農業主は通商条約による保護関税の引下げに強く反撥していた。自国内の社会民主党に悩まされるザクセン王アルベルトは、皇帝に強力な措置を勧めた¹⁵⁾し、ミーケル、ポートも皇帝と会談していた。この演説の数日前、9月2日、皇帝はポートを呼び、社会主義者にたいする措置をプロイセン法でなく、ライヒ法で実現すること、万一のクーデタに必要な連邦諸国の協力はザクセン王、ヴェルテンベルク王によれば確実であると言明した。ポートがカプリューヴィとの意見の調整が必要であると指摘すると、宰相の更迭、ある將軍の宰相任命を示唆した (Röhl, Nr. 991. Botho—Philipp. Berlin, 9. Sept.)。後継宰相に誰を擬したかは明らかでない。皇帝の命令で、9月8日、ポートはカプリューヴィにこの会談の結果を伝えた (Zechlin, Anlagen 8. Botho—Caprivi)。翌9日、皇帝はカプリューヴィに次のような電報を打った (Zechlin, Anlagen 9. Wilhelm II—Caprivi.)。転覆政党にたいする措置はライヒ法でなさるべきである。例外法は成立する見込みがない。ライヒ結社法は連邦諸国の結社法との関係で困難である。現行法の強化による以外にない。まず財政(タバコ税)法案を提出し、次いで刑法強化法案が提出されるべきである。帝国議会が拒否したら、解散を重ね、参議院(即ちドイツ君侯)は新選挙法を「欽定」すべきである。「最後の手段、クーデタ」である、と。

皇帝のさきの演説は、離反するユニカーを中心とする保守勢力(保守党、帝国党、農業主連盟など)の支持を獲得し、革命の恐怖を煽りながら、資本家階級とくに中間層(自由主義諸党、中央党など)を引きつけ、連邦諸国の支持を背景に選挙法改革を強行し(クーデタ)、帝国議会から社会民主党を一掃する計画、換言すれば、転覆政党(社会民主党)を排除しつつかつての政党カルテル(保守党、帝国党、国民自由党)を復活し、出来れば大衆的基盤に立つユニカーと資本家階級との同盟を再編強化する計画を示唆した綱領的演説であった、と評価すべきであろう。バマンが「皇帝の演説のうち、この演説ほど長年にわたって内政に影響を及ぼした演説は少ない」¹⁶⁾ というのも頷ける。

5 皇帝の期待と現実との乖離

ケーニヒスベルク演説後、皇帝は意気軒昂たるものがあつた。だが事態は皇帝の期待した方向に運ばず、むしろ期待を裏切る方向に進展した。

まず、ベルリンの政界の状況と連邦諸国の反応をみてみよう。フィーリから助言を求められたバーデン大公は、大公国の宮内相兼外相ブラウアー (Arthur von Brauer, 1845-1926) をベルリンに派遣して情報を蒐集させた。彼は90年—93年に、大公国の参議院全権代表とし

てベルリンに駐在し、中央政界に知己も多く、事情に通じていたからである。彼の大公宛報告は、客観的な鋭い観察であるに止まらず、大公のフィーリ宛返信、一般に緊迫する政局にたいする大公の判断と対応の基礎となっただけに注目すべきものであった。以下にはこの報告を引用しつつ述べてみたい。ブラウアーによれば、カプリーヴィは指導力を失い、もはや統一的な中央政府は存在しない。カプリーヴィ、ポート、ミーケル、ボザドフスキー (Arthur Graf von Posadowsky-Wehner Frhr. von Postelwitz, 1845-1932, ライヒ蔵相) は、それぞれ徒党を擁し、4大派閥として相対立している。「このままではどうしようもない。皇帝は決断すべきだ」という点でのみ一致している。無政府主義者にたいする措置の問題が危機を打開するかも知れない。ポートは保守党の援助を待み、社会民主党と無政府主義者にたいするきびしい法律を実現しようとしている。カプリーヴィ支持者はその非現実性のなかに宰相打倒の陰謀をみる。ミーケルはポートを、ボザドフスキーはカプリーヴィを支持するから、プロイセン政府とライヒ政府との決闘であるともいえよう。両者ともその立場を固執するから「結局は皇帝が人事問題として決着をつけざるを得ない」であろう。「特徴的なのは、何れの側も、勝利の確信はなく、みせかけているにすぎないことである。」(Fuchs Nr. 1341. Brauer—Großherzog. Berlin, 12. Sept.) クーデタ路線を聞いてぬくためにはビスマルクのような強力な指導力をもつ人物が必要である。ミーケルはポートに期待するけれども、「私にはポートがそのような課題を果し得るとは思えない。彼は賢明で如才ないが、先見の明のある政治家というよりも、資質に欠ける事細かな人物で、議会にも確実な支持者を持っていない。」(Fuchs, Nr. 1343. Brauer—Großherzog. Berlin, 14. Sept.)

次に、連邦諸国政府の転覆運動取締りにたいする態度をみてみよう。ブラウアーによればカプリーヴィは、自らの路線の支持を暗に求めて、バイエルン、ザクセン、ヴュルテンベルクの三王国政府の意向を、ベルリン駐在の公使に打診した。バイエルンとザクセンは「例外法は現状では、つまり普通直接選挙権の下では、実現できないとする点で一致する。一般法とくに刑法、必要とあらば出版法の強化を望む点でも一致する。だが、ザクセンが帝国議会での断固たる行動を要望したのにたいして、バイエルンは慎重で冷静な態度であった。」とくにカプリーヴィには重要であった問題、帝国議会の解散ないしクーデタのさい宰相を支持するか否か、については、両国政府とも回答を拒否した。ヴュルテンベルク政府はさらに慎重ですべてをライヒ政府に委ねた。このような状況を確認したブラウアーは、バーデン政府も「さしあたり意見を留保するのが得策である」と進言していた。そして結論的に次のようにいう。「状況は重大である。ポートとミーケルが国民は政府に強力な行動を期待しているというのは尤もである。カプリーヴィ派が帝国議会は承認すまいというのも正しい。……私は皇帝が宰相の刑法強化案を嘉すれば、宰相とプロイセン首相の二頭政治も維持でき、危機は收拾できると思う」と (Fuchs, Nr. 1345. Brauer—Großherzog. Berlin, 15. Sept.)。つまり、さしあたりカプリーヴィ路線で事態を收拾すべきであるというのであった。

ブラウアーは帰路の途中、バイエルン首相クラルスハイムと会談し、カプリーヴィ路線支持を再確認した。このとき首相は、ポートの強硬路線とともに「超保守的反動政治」がはじまり、このためバイエルン議会が混乱するのを極度に恐れていた (Fuchs, Nr. 1346. Brauer—Großherzog. München, 18. Sept.)。連邦諸国といっても君侯、政府、議会の意見は、それぞれの置かれた状況を反映して微妙に異なるが、皇帝は君侯の意見しか聞か

かった。ザクセン王アルベルトは社会民主党にたいする強力な措置を望むけれども、ザクセン政府は必ずしもそうではなかったのである。

6 フィーリの後退

フィーリはポート宰相実現に向って動き出したものの、たちまち状況の悪化を認めざるを得なくなった。

第一に、ブラウアーの確認したような連邦諸国のポート路線にたいする曖昧な、むしろ否定的な態度については、フィーリも別の情報源から知らされていた(Röhl, Nr. 995. Kiderlen—Eulenburg. Berlin, 24. Sept.)。とくにホーエンローエは「バイエルン、ヴェルテンベルクの政府は、最初の恐怖が過ぎ去った現在、[きびしい鎮圧法に——引用者] 同意すまい。社会党、進歩党、中央党にたいして帝国議会で多数を獲得できないであろう。かかる状況では気のぬけた法律は宰相危機ないし閣僚危機に値しない」といていた(Röhl, Nr. 994. Hohenlohe—Eulenburg. Berlin, 20. Sept.)。

第二は、ビスマルク復活への恐怖である。皇帝は、さきの演説にたいする「ハンプルク通信」の論評に満足し、ビスマルクの支持があるから、帝国議会での強力な行動も成功するにちがいない、といていたし(Röhl, Nr. 996. 注2)、ポートも「転覆運動にたいする闘争での重要な援助」とした(Fuchs, Nr. 1345. Brauer—Großherzog. Berlin, 15. Sept.)。一方、ビスマルクの皇帝支持に疑念を抱き、不安と恐怖に怯えたのは、ホルシュタインであった。「彼はカノッサだけを見て、とりみだし、手に負えない」とフィーリはビューローに嘆いたほどである(Röhl, Nr. 996. Eulenburg—Bülow, Rominten, 25. Sept.)。だがビューローもフィーリに、カプリーヴィ失脚は「ビスマルク一族に道を拓く」だけでなく、ほかにも「極めて重大な」結果をもたらすであろうというホルシュタインの見解に賛成する、と述べていた(9月25日付書簡, Röhl, Nr. 1006. 注2)。明らかに彼らは、ビスマルク復活の夢魔に怯えていた。というのも彼らは、90年3月のビスマルク危機を次のように解釈したからである。ビスマルクは危機を意図的に醸成したのであって、その指導力ないし統治力を絶対に必要とするような、換言すれば皇帝が彼に依存せざるを得ないような状況を生み出すことによって、宰相権力を維持しようとした、と。ここからカプリーヴィ危機が収拾し難い混乱に陥れば、ビスマルク待望論が高まり、これを背景にビスマルクが復活するかも知れない。復活すれば、彼ら反ビスマルク派は一掃されるであろう、と怯えたのであった。

このような状況に直面してはフィーリも若干軌道を修正せざるを得ない。ポート宰相実現計画を一時後退させ、さしあたりカプリーヴィとポートとの妥協に全力を挙げることにした。9月26日、彼はホルシュタインにこういった。皇帝はケーニヒスベルク計画に固執している。「当面、二つのことが絶対に必要である。(1)カプリーヴィを傷つけてはならず、辞任すべきでない。(2)何としてもカプリーヴィとポートとを妥協さすべきである。……例外法について皇帝は何も知らない——刑法の有用な強化しかない。君はカプリーヴィを激励されたい、私はポートに穏健化するよう忠告する。両者は一致すべきである。さもないと現状は維持できない。私は皇帝のために覚書を認め、ライヒの危険を述べ、ビスマルクに反対する所存である」(Holstein, Nr. 421. Eulenburg—Holstein. R [ominten], 26. Sept.)と。

そして、27日次の覚書を起草し、28日皇帝の前で読み上げた (Röhl, Nr. 1002. Aufzeichnung Eulenburgs. Rominten, 27. Sept.).

「社会主義と転覆政党克服のため」「現行刑法を強化する」「法案を帝国議会に提出する」ことの「利点」は、(1)平和的な国際情勢にあること、(2)連邦諸国の君侯の構成ではザクセン国王、ヴェルテンベルク国王は信頼でき、バイエルン摂政は社会主義者に恐怖を抱いている。(3)政党は四分五裂で、一般的不満は高まっているから、「転覆にたいする闘争」のスローガンは大衆に牽引力をもつ。(4)帝国議会解散の場合、転覆にたいする闘争は有効な選挙スローガンになるから、時期的には有利である。／ 穏健な法案ならば成立するが、きびしい法案には帝国議会は反対するし、その時は解散せざるを得ない。帝国議会と政府との争いは選挙法改革か軍事力によってのみ解決されよう。／ 帝国議会選挙法改革の難点は、(1)選挙法改革はライヒ憲法改革である。ライヒ憲法は連邦諸国憲法の一部となっているから、選挙法改革は連邦諸国の君侯、政府、議会の関係を悪化させるかも知れない。(2)選挙法改革の代償としてバイエルンは自国に有利なライヒ憲法修正を要求しよう。これはプロイセンの指導的地位を脅かすにちがいない。(3)軍事力が必要であるが、これはライヒ解体の危機をもたらそう。フランスが侵入する危険も生じる。(4)皇帝のケーニヒスベルク演説をビスマルクは支持した。ライヒが混乱に陥れば、ビスマルクを呼ばざるを得なくなろう。これはカノッサの屈辱となろう。／ ビスマルクは最近必要とあらば援助すると示唆している、と。

フィーリは、クーデタにいたらざる程度の刑法強化でカプリーヴィとポートとを妥協させようと意図し、これを皇帝に進言したのであった。この覚書を読み上げた後、フィーリは皇帝に、仄聞するところではカプリーヴィはポートと一致し得る法案を提出する意向であると伝えた。皇帝は喜んで「私はこれまでも、宰相がまともな法案を提出するときは、一生懸命に支持してきた」といった (Holstein, Nr. 427. Eulenburg—Holstein. R [ominten], 28. Sept.).

ところで、9月5日のフィーリの書簡にたいするバーデン大公の9月25日付返書は、9月30日頃フィーリの手に残ったから、27日の覚書には大公の意見は反映されていない。しかし大公の地位を考慮すれば、この意見は重要と思われるので、以下に要点を記しておこう (Röhl, Nr. 998. Großherzog—Eulenburg. Rémilly, in Lothringen, 25. Sept.). 無政府主義と社会民主主義にたいする措置でカプリーヴィ、マルシャルは、ポート、ミーケルと対立している。三王国政府は刑法強化を望んでも、例外法は欲しないし、クーデタのさいの支持は期待されない。ポートとミーケルはクーデタ路線を主張するが、これを貫徹しうるだけの力量を持つとは思えない。宰相職とプロイセン首相職を再統合し、これにホーエンローエを推薦したい。彼は高齢であるとはいえ、視野が広く賢明で先見の明に富み確固たる指導力を備えている。副宰相兼プロイセン副首相にはフィーリを推薦する、としたのである。大公は、宰相を更迭して政府の統治力を強化し、財政法案を処理した後、連邦諸国政府の協力を得て転覆運動にたいする措置を講ずべきであるという意見であった。10月7日、フィーリは礼状を認め、さしあたり刑法改正案について皇帝、カプリーヴィ、ポートの妥協に努める意図を報告していた (Röhl, Nr. 1018. Eulenburg—Großherzog. Liebenberg, 7. Okt.).

7 カプリーヴィ路線の再確認

10月5日、カプリーヴィは皇帝に上奏した。このときの状況をマルシャルはこう報告している(Röhl, Nr. 1013. Marschall—Eulenburg. Berlin, 6. Okt.). カプリーヴィは転覆法案提出に賛成するとともに、皇帝が開院演説でこれを予告する必要を強調した。皇帝はこれに反対し、財政(タバコ税)法案が成立するや、帝国議会に不意打ちをかけ、解散すべきであるとした。カプリーヴィが転覆法案問題は新聞で論じられているから隠せないし、逆効果であると反対すると、皇帝はクーデタ計画を開陳した。カプリーヴィはその危険を指摘したが、皇帝が譲らないのをみて辞意を表明した。皇帝は辞任を認めず結局プロイセン内閣での法案審議を見守ることで上奏は終った、と。皇帝はフィーリとともにカプリーヴィとポートの二頭政治を堅持する方針であったから、主観的にはカプリーヴィを「激励」したのであって、カプリーヴィの辞意表明には意表を衝かれたようである。それはともかく、カプリーヴィの辞意表明で事態は単純化し、関係者の主観的意思を超え客観的に内在する固有の論理に従って運動しはじめる。マルシャルもいうように、クーデタ政策を追求するかどうかは、プロイセン内閣に、そしてポートに委ねられたし、追求する場合、宰相更迭は不可避となった。しかもカプリーヴィが辞任したら、世論はこれをクーデタへの第一歩と看做すことも確実であった。二頭政治を堅持しようとするれば、ポートが譲歩する以外になかった。

10月10日、フィーリは皇帝と会談した。皇帝は5日の上奏について「カプリーヴィに協力する意志は認められない」「私を脅そうとすらし」と怒りポートの宰相任命をも考慮したが、フィーリは賛成する筈もなかった。皇帝、ポート、フィーリの三者間のそれぞれの会談の結果はカプリーヴィ・ポート妥協路線の維持を再確認したに止まる(Röhl, Nr. 1020. Phil—Botho. Hubertusstock, 10. Okt.; Haller, p. 157. Eulenburg—Holstein. 10. Okt.).

10月12日、プロイセン閣議が開催された。ここでの注目すべき発言を議事録から拾ってみよう(Zechlin, Anlagen 10. Protokoll der Ministersitzung vom 12. Okt.). まず宰相カプリーヴィが、9月9日付の皇帝の電報(上述)を読み上げ、ビスマルクのクーデタ理論(帝国憲法は君侯間の契約であるから、君侯の同意を得れば、更新つまり憲法を改正し得る)は法的に誤り政治的に危険であると批判し、さらにライヒ解体の危険、帝国議会での政党構成を挙げ、クーデタ政策には協力できない旨を表明し、各閣僚に意見表明を求めた。プロイセン首相ポートは、転覆運動にたいする有効な措置は絶対に必要で、クーデタを挑発する意図はない、法律で社会民主党が一掃されるとは思わないが、国家と社会の確実な支柱を創るべきである、法案の具体的審議を望むと述べた。驚くべきはプロイセン蔵相ミーケルの旋回であった。これまでポートを支援してきた彼は、一転してカプリーヴィ路線の支持を表明したからである。法案は帝国議会と衝突しないよう作成さるべきである。穏健な法案ならば、中央党の支持を得て成立できよう。政府の支柱をなす教養市民層は未だクーデタを是認しない。当面する危機が、「社会的王制」の指導下に克服されることを期待する。政府は有産階級のためだけでなく、労働階級のためにも努力していることを明確にすべきである、

と。ミーケルの旋回の理由については詳らかにしないが、一つには、クーデタの前提とした連邦諸国政府の曖昧な態度、二つには、教養市民層の穏健路線支持が挙げられよう。支持母体である国民自由党の代表者会議は、9月30日、フランクフルトで開催され、皇帝のケーニヒスベルク計画への期待を表明したが、教養市民層は急速に沈静化したように思われる(Fuchs, Nr. 1351. Jagemann—Brauer. Berlin, 28. Sept.). プロイセン文相ボッセは、法案の成立を目指して内容を必要最小限に限定すべきであると述べ、カプリーヴィを支持した。プロイセン商相ベルレブシュは、カプリーヴィのこれまでの政策を全面的に支持した。社会主義者鎮圧法は、社会民主党の発展を阻止できなかったため、更新されなかった。社会民主党は未だ後退をみせないものの内的には分裂しはじめている。このため法案は無政府主義者の策動を対象にすべきである、と。これにポートは反論し、社会主義者鎮圧法消滅以来、潜在的無政府状態といってよく、現在の法的手段ではどうしようもないと述べた。こうして、10月19日に転覆政党にたいする措置を改めて審議することで散会した。

12日の閣議で、ミーケル、ボッセ、ベルレブシュがカプリーヴィを支持し、ポートが孤立したことに「驚愕した」フィーリは、早速カプリーヴィと会談し、「皇帝は宰相を支持するし、ポートも宰相との妥協を求めていると保証した。」そして直ちにポートにこれを伝えた。「今や妥協を目指して努力しなくてはならぬ。さもないと皇帝は窮地に陥る」からである。この日、彼は皇帝とも会談した。「彼は私の考えを理解した。」(Haller, p. 157-8. フィーリの10月13日の日記)

危機感を募らせたフィーリは、10月15日、皇帝に念を押した。カプリーヴィとポートとの妥協が成立しなければ、カプリーヴィは辞任しよう。これは皇帝を窮地に立たせよう。穏健公正なカプリーヴィを誅首した暴君と極めつけられるからである。さような状況ではポートも後任宰相に就けないであろう、と。皇帝は驚倒し、全力をつくしてカプリーヴィとポートとを一致させると言明した(Röhl, Nr. 1029. Phil—Bülow. 17. Okt.). マルシャルによれば「カプリーヴィは譲歩せず、妥協すまいと決心していた」(マルシャルの10月13日、14日の日記, Fuchs, Nr. 1365. 注1)から、これは皇帝がポートに譲歩を迫ることを意味した。

10月19日の閣議では、刑法改正法案が具体的に審議され、若干ポート案に譲歩したものの、本質的にはカプリーヴィ案にしたがってまとめられた。両者が対立し譲らなかった結社と集会について予防措置を講ずる問題では、次のような姑息な手段に落着いた。連邦諸国はそれぞれ独自の結社法・集会法をもつから、まず連邦諸国の意見を徴する。連邦諸国は、ライヒ法がそれぞれの法的権限を制限するのを好まず、ライヒ法での規定に強く反対するであろう、というのである。ミーケルもポートもこの措置に賛成した。

バーデン大公国のベルリン公使ヤーゲマンは、この閣議に提出されたカプリーヴィ案(ライヒ司法部で作成)、ポート案(プロイセンの内務省と司法部で作成)と閣議での最終決定案を比較検討し、次のような注目すべき報告をまとめた(Fuchs, Nr. 1379. Jagemann—Reck. Berlin, 31. Okt.).

ポート案では確実に、社会民主主義者、反ユダヤ主義者、農地改革論者、文化闘争で受身の抵抗を支持したもの、とにかく何もしなくとも、転覆運動を支持するものは、処罰されると、彼はいう。処罰される範囲も拡がり、(1)社会主義者鎮圧法(これは集会・結社・組合金

庫を対象にし、個人では煽動者を抑圧した）を遥かにこえ、積極的に行動はしなくとも転覆的見解を公然と表明するもの、またこれを許容するものは処罰される。(2)政治上の極く些細な過失も処罰される。(3)企図や試みも処罰されるし、教唆、煽動、信奉にはその努力も含まれる。(4)社会民主主義者であるというだけで処罰され、社会主義者のため票を集めたものも処罰される。結論的にヤーゲマンは次のように論評する。ポート案が帝国議会で成立するとは到底考えられないし、たとえ法律になっても、大衆をすべて起訴できる筈もない。ポート案が、現実政治的には無意味であるにも拘らず提案されたことは、それが自己目的でなく、他の目的（保守党、農業主に有利な人事の実現、選挙法改革闘争）のための手段であったことを示している、と。

8 解 任 劇

カプリーヴィ解任の直接の経過については、次の史料がある。第一に、皇帝は、辞任承認の10月26日、バイエルン、ザクセン、ヴェルテンベルク、バーデンの駐ベルリン公使を招き、宰相更迭の事情を説明したが、これら公使のそれぞれ本国政府にたいする報告である。(Zechlin, Anlagen 12. Wilhelm II. über Caprivi's Entlassung. (A) Lerchenfeld—Prinzregent. Berlin, 26. Okt.; (B) Hohenthal—Metzsch. Berlin, 26. Okt.; Fuchs, Nr. 1372. Jagemann—Reck. Berlin, 26. Okt.) また皇帝のバーデン大公への簡単な通知もある。(Zechlin, Anlagen 12. (C) Wilhelm II.—Großherzog. 26. Okt.) 第二は、カプリーヴィの説明である。(Zechlin, Anlagen 13. Caprivi über seine Entlassung. (A) Lerchenfeld—Crailsheim. Berlin, 29. Okt.; (B) Hohenthal—Metzsch. Berlin, 29. Okt.) 第三に、フィーリの説明である。(Röhl, Nr. 1037. Eulenburg—Großherzog. Liebenberg, Mark, 26. Okt. [Fuchs, Nr. 1370.]; Haller, p. 162-166; Eulenburg—Bülów. Liebenberg, Mark, 1. Nov.) 新しい史料は極く僅かであるが、これらを参照し、10月18日から26日の解任に至る過程を述べてみよう。ここでは皇帝をめぐる、一つにはポートの側からの挑発、二つにはカプリーヴィの側からの反撃がみられ、結局、皇帝は両者の辞任を承認し、帝国直轄領エルザス・ロートリンゲン州総督ホーエンローエ (Chlodwig Fürst zu Hohenlohe-Schillingsfürst, 1819-1901) を宰相兼プロイセン首相に任命した。10月18日、皇帝はポツダムでの新編成部隊への軍旗授与式に臨み挨拶した。「わが帝国の唯一の支柱は軍隊であった。今日でもそうである！ここに招集された軍旗は本来完全大隊に与えられるものである。私は今日軍旗を授与された不完全大隊がすぐに完全大隊となり祖国に奉仕するのを期待する」と。そして午餐会で皇帝はカプリーヴィに冷淡な態度をみせ、「不完全大隊が完全大隊になったら、感謝するでしょう」といった。不愉快になったカプリーヴィは、すぐホルシュタインを呼び顔末を話した。ホルシュタインは「一難去ってまた一難」と嘆いた。転覆法案に加えて完全大隊化の予算獲得という困難な課題（93年の軍拡法案は帝国議会を解散してやっと成立した）を負わされたからである。「危機は今や二つの未解決問題のため、転覆法案だけのときよりも悪化し、絶望的になった」と落胆してフィーリに書いた (Röhl, Nr. 1031. Holstein—Eulenburg. Berlin, 19. Okt.)。フィーリも事態を重視し、バーデン大公に電報で翌21日の会談を申込むとともに、皇帝に書簡を認め、完全

大隊化発言をうけ宰相は辞意を強めたようであるが、「いま退陣させれば、皇帝には良くない政治的結果をもたらすであろう」と述べた。皇帝は電報で返事した(21日)。「有難う。余計な人騒がせた。彼はそんなことを考えないし、私も思わない。バーデン大公と会談した。全て順調。転覆にたいする措置についても。落着け、悲観的に見るな。」

10月20日、皇帝は東プロイセンの農業主連盟の代表団を接見した(Röhl, Nr. 1033. August-Philipp. Neues Palais, 20. Okt.). 農業主連盟は反カプリーヴィとして知られ、この代表団を率いた帝国議会議員グレーベンはその急先鋒であった。彼らを皇帝に紹介したのは、ポートとアウグスト・オイレンブルク(August Graf zu Eulenburg, 1838-1921, ポートの弟、宮内相[1890-1914])であって、フィーリによれば「意図なくもなかった。」カプリーヴィとポートとの「懸隔を埋められないもの」にすれば、皇帝はポートを宰相に選ばざるを得ないであろうと思ったのである。(Haller, p. 162-166 Philipp-Bülow. Liebenberg, Mark, 1. Nov.) 10月21日、マルシャルは日記に次のように記した。「宰相は辞任願提出を決意している。軍旗授与式の挨拶と昨日の接見はひどすぎる。私は反対しない。かかる惨めな状況が続くよりも、名誉をもって没落する方がよい。」(Fuchs, Nr. 1870. 注4) 同じ21日、フィーリは日記に次のように記している。皇帝の完全大隊化発言、午餐会での冷淡な態度のため、カプリーヴィは不快になっている。しかも彼に諮らずに皇帝のロシア皇帝葬儀出席も決定された(すぐ中止された一引用者)。ポートが農業主連盟の代表団を皇帝に紹介したことも、カプリーヴィを傷つけた。そこには彼の断固たる反対者も含まれていたからである。まさに危機である。マルシャルもホルシュタインも落胆している。バーデン大公は皇帝と会談したし、カプリーヴィにもいま辞任すれば皇帝と帝国とを脅かすことになる、と説得したという。大公は、皇帝を損わないようカプリーヴィを辞任させる決心を固めている。後任宰相は困難だ。皇帝はポートを考えていない。私宛の書簡にあったように、大公はホーエンローエを推している、と。(Haller, p. 159-160)

10月23日午前10時、カプリーヴィは辞任願を皇帝に送付した(Zechlin, Anlagen 11. Abschiedsgesuch Caprivis. Berlin, 23. Okt.). ここでは、刑法改正法案については「形式上一致をみた」とはいえ、ポートの見解との間には「埋められない懸隔」があるとしていた。皇帝は辞任を「認めない」とした。「彼の希望は全てかなえられ、ポートは譲歩したではないか」と思ったのである。2時45分—3時半、皇帝はカプリーヴィを訪れ、理由を尋ねた。カプリーヴィは「皇帝の信任を欠く」として、(1)宰相に予め諮ることなく、90年1月、ビスマルクと和解したこと、(2)宰相に予め了解を求めることなく、農業主連盟代表団を接見したこと、(3)ポートと一緒に国政を続けられないこと、を挙げた。これにたいして皇帝は、(1)には「君主と臣下との関係」の問題である、(2)には皇帝は臣下の意見を積極的にきくべきであるし、保守派との関係改善は宰相にも有益な筈である、(3)には宰相を全面的に支持するから、辞表の写しをポートに送り、宰相の意のあるところを知らせたらよい、と答えた。カプリーヴィは了承し、事実上辞表を撤回した。

危機を脱したと思った皇帝は、この23日、フィーリの所領リーベンブルクに狩猟に赴いた。皇帝に招かれたポートは、25日到着すると、辞表を提出した。理由は、宰相が辞表で「埋められない懸隔」があると述べたことにあった。皇帝は驚き、撤回を懇請したけれども、首肯しなかった。フィーリにも方策はなかった。カプリーヴィにポートの留任を要請させること

しか浮ばなかった。フィーリにとって、ポート辞任はポート宰相計画の最終的失敗を意味するだけではない。保守派はポートが辞任すれば、反カプリーヴィ的態度を一層強化するであろう。かくてポート辞任は宰相更迭に至らざるを得ないとして、後任宰相にフィーリが、バーデン大公の推すホーエンローエを挙げると、皇帝は賛成した。(Haller, Philipp-Bülow, Liebenberg, Mark, 1. Nov.) 25日夜、皇帝はベルリンへの帰路、車中で「ケルン新聞」に23日の皇帝と宰相との会談内容が掲載されているのを知った。26日、皇帝の使者として文官内局長ルカーヌスがカプリーヴィを訪れ、「ケルン新聞」記事の否認とポートとの和解を求めたが、カプリーヴィは拒否した。そこで皇帝は今一度カプリーヴィと会談したが、カプリーヴィは態度を変えず、ポートに加えてミーケルの辞任をも求めたので、皇帝としては辞任を認めざるを得なかった。

「ケルン新聞」の記事については、内容がカプリーヴィから出たことは誤りないが、誰がこの記事を新聞に掲載させたかは明らかでない。ハマンはホルシュタインと推測する(Hammann, p. 104)。それが誰であれ、カプリーヴィとしては政策路線の明確化を求めたのであって、皇帝と最後の会談で決裂した際、ポートを後任宰相に推薦したことにはそれは認められる。皇帝はこれを拒否したが、理由はポートが残れば、若い皇帝と一緒にクーデタを起すと世論に受取られるからである、とした。

9 若干の結論

ここで、時期区分の(4)新宰相ホーエンローエの下での秩序維持法案をめぐる問題を取扱うべきであるが、この問題については稿を改めて論ずることにし、反省をこめた総括をしておきたい。

第一に、小稿ではカプリーヴィとポートとを対抗させ、対立点を強調した。このためカプリーヴィを積極的に再評価する結果となった。この点については批判もあるだろうが、私としては、カプリーヴィはもっと再評価されて然るべきではないか、と思っている。

第二に、小稿では皇帝のケーニヒスベルク計画をやや過大評価した嫌いがあるのではないかと反省している。カプリーヴィとポートの辞任というある意味では予期せざる事態にいたり、皇帝のケーニヒスベルク計画はさしあたり失敗した。われわれはこの原因ないし理由を皇帝の統治能力の欠如とかカプリーヴィの非社交的性格などにのみ求めてはならぬであろう。カプリーヴィの通商政策によってユンカーと産業資本家のインタレストは全く相反する方向に向い「転覆政党にたいする闘い」のスローガンでは最早両者を結集できない程、疎隔したのであった。ユンカーつまり保守派はカプリーヴィ打倒では一致したものの、後継宰相を誰にするかで分裂した。一方、産業資本家つまり自由主義諸党にはカプリーヴィを擁護する意思もなければ、政治的力量もなかった。こうみると皇帝のケーニヒスベルク計画は現実性を欠いていた点を指摘すべきであったかも知れない。皇帝のケーニヒスベルク計画が本来もつ反カプリーヴィ的契機を見失ったことを反省したい。

第三に、ロエールのヴェーラー批判について。小稿を通じて私はヴェーラーの次の所説を再確認せざるを得なかった。ビスマルク失脚後「プロイセン・ドイツの権力ピラミッドはその首脳者を欠いていた」「ビスマルクの能力に合わせて裁断された憲法、ビスマルクに馴じ

んだ憲政は調整の中心を欠いたのである。かくして現実には、また雰囲気としても、権力の真空が生じ、これをさまざまな人物や勢力が満たそうとした。結局のところ彼らも議会もそのことに成功しなかったので、ドイツには思い上がった統治の模造品の陰で恒常的な国家危機が支配するにいたり、この危機は競合する権力諸中枢の多頭制をもたらした。この体制は、ドイツの政治がそれ以来しばしばどったジグザグ・コースの原因でもあった。」(邦訳、p. 108-109)

註

- 1) Erich Eyck, Das persönliche Regiment Wilhelms II., Politische Geschichte des Deutschen Kaiserreiches von 1890 bis 1914, 1948.
- 2) Ernst Rudolf Huber, Das Persönliche Regiment Wilhelms II., in: Zeitschrift für Religions- und Geistesgeschichte, 3. Jg. (1951) p. 134-148.
- 3) Fritz Hartung, Das persönliche Regiment Kaiser Wilhelms II., 1952, (Sitzungsberichte der Deutschen Akademie der Wissenschaften zu Berlin)
- 4) J.C.G. Röhl, Kaiser Wilhelm II., Großherzog Friedrich I. und der "Königsmechanismus" im Kaiserreich, in: Historische Zeitschrift, Bd. 236 (1983) p. 539-577, abgedr. in: ders., Kaiser, Hof und Staat, Wilhelm II. und die deutsche Politik, 1988, p. 116-140, ここでロエールが批判の対象としているのは、Hans-Ulrich Wehler, Das Deutsche Kaiserreich 1871-1918, 1973, (ハンス・ウルリヒ・ヴェーラー [大野英二・肥前栄一訳] 『ドイツ帝国 1871-1918年』 未来社, 1983年) である。
- 5) Egmont Zechlin, Staatsstreichpläne Bismarcks und Wilhelms II. 1890-1894, 1929.
- 6) J. Alden Nichols, Germany after Bismarck, The Caprivi Era 1890-1894, 1958.
- 7) J.C.G. Röhl, Germany without Bismarck, The Crisis of Government in the Second Reich, 1890-1900, 1967.
- 8) Rolf Weitowitz, Deutsche Politik und Handelspolitik unter Reichskanzler Leo von Caprivi 1890-1894, 1978.
- 9) 宰相カプリーヴィに近い外務省新聞情報担当参事官ハマンの回想 (Otto Hammann, Der neue Kurs, Erinnerungen, 1918, p. 97-98,) によって当時の新聞論調をみておこう。ビスマルクの「ハンブルク通信 Hamburger Nachrichten」は「無政府主義分子を含む」社会主義者にたいする例外措置、つまり再版社会主義者鎮圧法を要求した。ブルジョワ政党は、社会民主党の抑圧では一致しても、手段と方法では意見を異にした。キリスト教社会派や反ユダヤ主義者がユダヤ精神に社会民主党増大の責任を求めると、自由主義者は反ユダヤ主義的煽動に革命を促進する一種の道徳的荒廃を認めた。中間諸党が新たな政党カルテルを要望すると、自由思想家党と極右勢力はこれに反対した。前者は進歩と反動との間を聞きぬかず隠蔽するのは愚劣であるとし、後者は万能薬を普通平等選挙権の廃止に求めたからである。ある論者が、社会主義という病氣は癒されつつあるとしてカプリーヴィの例外法要求にたいする醒めた態度を賞揚すると、社会主義者鎮圧法への復帰を要求する陣営はこれを嘲笑した。またある論者は、革命運動にたいする有効な対策の前提は、政府が農業主いじめを反省し、ブルジョワ政党の衰退を阻止することであると論じた。以上のようにハマンは総括するが、ここからわれわれは、当時の世論の動向、また政府筋のこれにたいする把握をある程度推測できるであろう。なお Zechlin, p. 95-97 の独自の新聞論調の分析も参照。
- 10) ここで皇帝ヴィルヘルム二世とフィーリとの関係について簡単に触れておきたい。1886年5月一

6月、フィーリはヴィルヘルム皇子、そしてまた外務省のホルシュタインと親交を結ぶ。88年6月。ヴィルヘルムが皇帝になると、この交友関係は政治的に重要な機能を持つ。89年夏以降のビスマルク危機では、このトリオが決定的役割を果たしたといえる。フィーリは皇帝との交友関係を利用して、人事と政策に影響を与え、93年12月には諷刺誌『クラダラダーチュ Kladderadatsch』によって、政治を蝕むホルシュタイン——ケーダレン——フィーリのトリオに反対するキャンペーンが始まった。フィーリの従兄弟アウグストの宮内相就任、アウグストの兄ボートのプロイセン首相、次いでプロイセン内相兼任も、フィーリの尽力によるものであった。皇帝とフィーリとをめぐる交友関係はリーベンベルク・グループとして知られる。(詳しくは参照, Röhl, Kaiser, Hof und Staat, ; Isabel V. Hull, The entourage of Kaiser Wilhelm II 1888-1918, 1982.)

尚、このときの北海旅行での会談については Fürst Philipp zu Eulenburg, Mit dem Kaiser als Staatsmann und Freund auf Nordlandsreisen, Bd. 1., 1931, には僅かに、7月9日に「ビルゼンで爆弾暗殺事件、シカゴで革命勃発のニュースが入る。私はさまざまな時事問題を皇帝と長時間話した。」の記事をみるにすぎない (p. 285-286)。

- 10) Zechlin, Anlagen 5. Caprivi—Frhr. v. Stumm-Halberg. Berlin, 8. Juli ; Anlagen 10. Protokoll der Ministersitzung vom 12. Okt., ; Anlagen 11. Abschiedsgesuch Caprivis. Berlin, 23. Okt., ; Anlagen 13. Caprivi über seine Entlassung. (A) Lerchenfeld—Crailsheim. Berlin, 29. Okt., (B) Hohenthal—Metzsch. Berlin, 29. Okt., ; Fuchs Nr. 1361. Jagemann—Brauer. Berlin, 8. Okt.,
- 11) Röhl, Nr. 986. Botho—Philipp. Berlin, 24. Juli, ; Nr. 987. Botho—Philipp. 26. Juli; Nr. 989. Eulenburg—Wilhelm II. München, 30. Aug.,
- 12) フィーリは、94年3月20日の皇帝への手記で ボート宰相、ビューロー外相実現の期待を表明した (Röhl, Nr. 933. Aufzeichnung Eulenburgs für Kaiser Wilhelm II, Auf der Bahn Meran-München, 20. März)。ここでは、ビスマルク辞任後の4年間を回顧し、ビスマルク派の攻撃にさらされながらも、皇帝を中心とする新たな統治体制が軌道に乗ったことを確認するとともに、皇帝の信任を欠く宰相カプリヴィ、外相マルシャルを更迭し、皇帝親政を一層推進するよう進言していた。ドイツは内政上、外交上いかなる問題に直面しているか、これを克服するにはどうすればよいかという発想は、およそフィーリにはみられない。
- 13) Festmahl in Königsberg für die Vertreter der Provinz Ostpreußen (6. September 1894), in: Ernst Johann (Hrsg.), Reden des Kaisers, Ansprachen, Predigten und Trinksprüche Wilhelms II., 1966, p. 61-63,
- 14) Die Königsberger Rede des Kaisers, (12. Sept. 1894, Morg.-Ausg.), in: Hermann Hofmann, Fürst Bismarck, 1890-1898, Bd. 2., 1913, p. 260-262,
- 15) ヴェルダーゼーは次のように述べている。「ザクセン王は社会民主党に悩まされ——事実脅迫的態度をとるようになったが——ケーニヒスベルクで皇帝に何かなすべきだと説得した。このため皇帝は挨拶などで「転覆」にたいする闘争をしばしば強調するようになった。」(Heinrich Otto Meisner (Hrsg.), Denkwürdigkeiten des General-Feldmarschalls Alfred Grafen von Waldersee, Bd. 2., 1923, p. 325) フィーリもアルベルト王の皇帝への影響力を認めている (Holstein, Nr. 421. Phil—Holstein, 26. Sept.).
- 16) Otto Hammann, Der neue Kurs, p. 99

尚、手許の史料から、皇帝演説にたいする別の対照的な評価を引用しておこう。「ニースヴィーツ、94年9月12/13日。私は、皇帝のケーニヒスベルク演説がベルリンで歓迎されているかどうか存じませんが、それは私の心に適うものでした。言葉遣いは上品で、敬虔であり、反対する態度を

捨て現今の革命家にたいして結集するようにとの農業主への要請は、立派な考えであると思います。今日では、尊敬をかちうる術を心得て、キリスト教的感情に訴え、臣下にたいして義務を果す君主しか評価されません。」(Fürstin Marie Radziwill, Briefe vom deutschen Kaiserhof, 1889-1915, 1936, p. 86-90)「9月12日。皇帝はケーニヒスベルク演説で心にもないことをつい洩らしたと思う。いつものことだ。わが門戸はあらゆる臣民に開かれているとの件は素晴らしい、無知な大衆に畏敬の念を抱かせよう。だが消息通は、皇帝は表面上は開放的だが近寄り難いのを知っている。多くの人が意見を述べたいと思っている！それが出来ないのは、教えようとしているとか忠告しようとしていると思ったら、皇帝は耳をかそうとしないからだ。側近でさえ皇帝とは内々で話が出来ないことがある。」(Heinrich Otto Meisner (Hrsg.), Denkwürdigkeiten des General-Feldmarschalls Alfred Grafen von Waldersee, Bd. 2., 1923, p. 322)